

水稻技術情報（③穂肥・斑点米カメムシ類対策編）

気象変動に負けない稲づくり ～適切な穂肥（追肥）と水管理を実践しましょう～

1 穂肥（追肥）のポイント！

- ・ 水稻にとって穂肥が必要な時期に適切な施肥量を施すこと。
- ・ 生育診断を必ず行い、穂肥時期と施肥量を決定すること。

表1 品種別穂肥時期のめやす（分施肥体系）

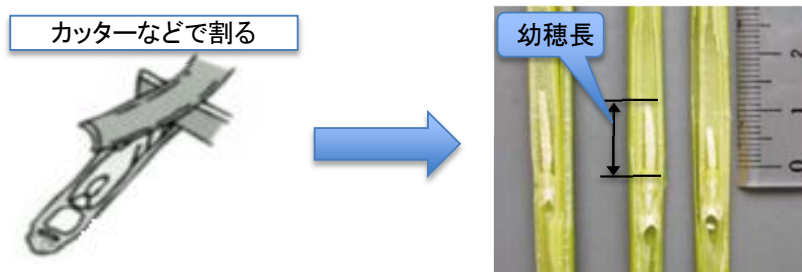
品種名	1回目穂肥窒素量 (kg/10a)	2回目穂肥窒素量 (kg/10a)	穂肥時期（出穂期前日数）		ポイント
			1回目	2回目	
五百万石	1～2	1～2	20	12	1回目を重視する。
ゆきん子舞	3～4	2～3	25～23	14	
つきあかり	3～4	2～3	25～23	14	
こしいぶき	1～1.5	1～1.5	23	14	
コシヒカリ	1～1.5	1～1.5	18～15	10	生育診断を行い施肥時期 や施用量を判断する。
わたぼうし	1～1.5	1～1.5	23～20	12～10	
こがねもち	1～1.5	1～1.5	18～15	10	生育過剰な場合は1回施 用とする

※表1に記載した穂肥時期（出穂期前日数）は、化成肥料の使用を前提とした時期です。有機質肥料や有機質入り肥料の場合は、これより数日早めに施用する。

※出穂期は、地域やほ場、田植え時期、生育期間の気象等により変動します。

- （1）穂肥は浅水状態で施用し、出穂期後25日以上は飽水管理とする。
- （2）コシヒカリでは、登熟期間が高温と予想され、また葉色が淡い場合（出穂期3日前・SPAD値31以下）は3回目の穂肥を検討する。
- （3）コシヒカリで全量基肥施肥（一発肥料）でも、出穂期までのSPAD値が32～33を下回ると予想される場合は追肥を検討する。
- （4）「新之助」は、各自の調査結果や新之助研究会の情報などを参考とし、施用する。

【出穂前日数の推定方法】



※幼穂は、生育が平均的な株から主稈を採取し、最低3本以上を測定する。

※採取する茎は最低1m以上畦畔から入り、水口、水尻付近をさける。

表2 出穂前日数と幼穂長

出穂前日数	30日	24日	20日	18日	12日	10日	8日
幼穂長(mm)	0.2	1	2～4	5～10	40～60	80～110	170

（水稻栽培指針 新潟県農林水産部(R3.2)を参考）

2 ケイ酸資材の活用～稲体や受光態勢の改善～

ケイ酸を多く吸収する時期（出穂40日～30日前）に施用する。

「ケイ酸の効果」

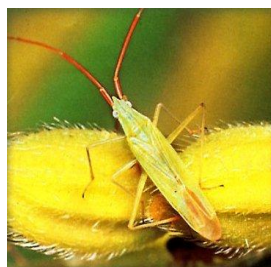
- ・ 葉が直立し、受光体勢がよくなる。
- ・ 根の酸化力を高め、根腐れ、秋落ちの防止になる。
- ・ 高温時、葉温が上昇しにくくなり、光合成の低下を防止し、登熟が向上する。
- ・ 病害虫に対する抵抗性が強まる。
- ・ 茎や葉が強剛になり節間が徒長せず倒伏しにくくなる。
- ・ 老朽化水田では、下位葉の枯上がりを防ぎ秋落ちを防止する。

3 斑点米カメムシ類による斑点米発生防止～イネ科雑草で多し！～

- （1）斑点米カメムシ類はイネ科雑草を好むので、種子が結実しない間隔で草刈りする。
- （2）各地域の一斉草刈り期間に合わせて除草し、斑点米カメムシ類の発生を減らす。
- （3）薬剤防除の場合、剤型（粉剤、液剤、粒剤等）により散布適期が異なるので、剤型に応じた適期に散布する。
- （4）共同防除のほ場で、散布適期から外れる極早生品種・早生品種のほ場には、共同防除前に追加防除する。（※追加防除が必要なほ場・品種は、出穂期が共同防除実施日より10日以上早いことを目安にする。）



アカスジカスミカメ



アカヒゲホソミドリカスミカメ



オオトゲシラホシカメムシ

【カメムシ類斑点米対策草刈りのポイント】

- 1 7月下旬にかけての草刈りは、早生の出穂前までに終了する。
- 2 地域の草刈り期間の前後を含めて、雑草が繁茂しない状況を維持する。
- 3 刈った草を放置しておくとかメムシの生息場所になるので処分する。
- 4 薬剤防除時に畦畔雑草を短い状態にしておくことで、畦畔に生息するカメムシに薬剤がよく到達して防除効果が高まる。
- 5 アカスジカスミカメは、イネ科雑草やカヤツリグサ科雑草の穂に産卵する。これらが繁茂すると斑点米の発生につながる。そのため、水田内の雑草発生を防止する。